本会顧問　貝塚茂樹博士訃

本会顧問の貝塚茂樹博士は、昭和六十二年二月九日午後四時二十分、急性心筋梗塞のため京都市左京区の病院で逝去された。享年八十二歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

博士は明治三十七年五月一日、地質学者の故小川琢治博士の次男として東京で誕生された。長兄が工学者の故小川芳樹博士、次弟が物理学者の故湯川秀樹博士、末弟が中国文学者の小川環樹博士という学者一家であったことは広く知られたところである。明治四十一年に京都に移住され、京都府立一中から第三高等学校文科丙類を経て昭和三年に京都帝国大学文学部史学科を卒業、同七年に東方文化学院京都研究所（のち東方文化研究所）研究員となって中国古代史の研究に従事された。昭和二十三年に同研究所が京都大学人文科学研究所に改組されるに伴って同研究所研究員となり、翌二十四年四月に京都大学教授に補せられた後、同年十月から六年間同研究所長の職につかれ、昭和四十三年停年退官されて京都大学名誉教授となられた。

その間、博士は中国古代史の研究によって昭和二十二年度の朝日文化賞を、また著書『諸子百家』で昭和三十七年度の毎日出版文化賞を受賞されたのをはじめ、昭和五十一年には文化功労者に選ばれ、五十九年には文化勲賞を受賞された。なお五十九年からは京都市名誉市民であった。

博士の多方面にわたる多大な功績については到底語り尽くせるものではないので、博士の現役時代最後の助手をつとめた立場から想い出を述べて遺徳を偲ぶことにする。

昭和三十七年に人文研に入って仰せつかった仕事は、数年前に出版された巨冊『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』の索引の作成であった。しかしこれは人文研に所蔵する三千数百片の甲骨文字のただ単なる索引ではなかった。というのは博士の方針により、既刊の字書である孫海波の『甲骨文編』と金祥恆の『続甲骨文編』をも網羅し、未釈の文字も可能なかぎり近似する部首に附載して新しい甲骨文字の字書を目ざした意欲的な出版であったからである。未完成ながら基本カードと、それをあらまし配列した原稿はできていたので、作業は甲骨の実物に当たって点検することから着手した。甲骨の大部分は小さな断片である。はじめて甲

骨の実物を手にして先ず感じたことは、博士が昭和十年代、当時わが国でただ一人この小さな断片に注目し、語る師も友もない中で研究に沈潜して、ついに殷代史を再構成されるに至った根気と努力である。それはおそらく執念に近いものであったに違いない。博士の往時の姿を想像し、身の引き締まる思いのしたことを今でもはっきりと覚えている。点検を通して学んだことが二つある。一つは出土資料の有する史料的価値の大きさである。博士の大著『中国古代史学の発展』によって知ってはいたが、実感としてはじめて認識することができた。他の一つは拓本と実物との間の大きな相違である。如何に精拓であっても細部まで完全に写しとっていないという発見は、従来拓本しか見ていなかっただけに驚きであった。博士の創始開拓せられた甲骨学を継承して更に新段階へと進められた伊藤道治教授や松丸道雄教授らが、甲骨資料には拓本のみならず写真を附しておられるのは、極めて当然である。出土資料は必ず実物に当たる、これが学んだ第二の点である。不肖にして甲骨学の道には進まなかったが、この二つは私の今日の簡牘研究の基本となっており、勉強の機会を与えて下さった博士に感謝しなければならない。索引原稿に疑問ないし問題点を附して博士のもとに提出したのは三十八年の秋ごろだったと記憶している。しかし博士は当時、日本学術会議会員で学術交流委員会委員長、ユネスコ国内委員会委員、財団法人東方学会理事等々の職につかれ、わが国の学術の発展や国際交流の推進に力を尽くされて多忙であり、出版に着手したのは退官直前の四十二年秋のことであった。本書の性質上、手書きしたものをオフセット印刷するという面倒な方法によらねばならず、全甲骨文字を浄書された美代夫人をはじめ多くの人の応援を得て、かろうじて退官に間に合わせることができたのは忘れられない想い出である。

甲骨文や金文の研究と並行して博士の主要な研究課題は、比較史的視点に立った中国古代都市国家の研究であった。昭和三十八年から三年間、この題目で京大文学部において講義をされた折に聴講したことがある。博士の講義は、後半になると板書に熱中され、時間がきて話はしり切れとんぼになることが多く、研究所での座談を交えた共同研究会の面白さとは対照的であった。それが『中国の古代国家』（著作集第一巻）として出版されると、達意の文章で展開されるユニークな古代都市国家論の面白さに思わず目を見はったものである。博士の平明な文章には定評があった。しかし文章表現に苦心されたことは博士自身の口からも聞いたし、また実際に一度博士の原稿を浄書したとき、原稿が真っ黒で文章が辿れず途方に暮れたことがある。博士が中国古代史研究のスペシャリストとしてのみならず、ゼネラリストとして広い層の多くの読者を引きつけられた裏には、その学識の深さと広さもさることながらこうした不断の努力があったのである。

法名を勧学院蒼空樹泉博道居士という。合掌。

（永田英正記）